



攻めの情シス バイモーダルITの考え方

2015年にガートナー社が発表して広まった、
ITの在り方を守りと攻め2つのタイプに分けて推進する考え方、
「バイモーダルIT」という言葉があります。

日本ではまだまだ馴染みのない言葉ではありますが、
この考え方は今後の情報システム部の在り方を変えるかもしれません。

今回はバイモーダルITの考え方を確認しながら、
情報システム部の今までとこれからがどう変わっていくことが考えられるか、
理想と現実とのギャップは具体的にどのように埋めるのか、
という観点も含めてこれからの情報システム部の強みとして、
こういったことを意識していくべきなのかを考察していきます。

目次

1. バイモーダルITとは何か
2. これまでの情報システム部
3. これからの情報システム部
4. バイモーダルITを取り入れた事例
5. これからの課題とまとめ

1. バイモーダルITとは何か

2. これまでの情報システム部

3. これからの情報システム部

4. バイモーダルITを取り入れた事例

5. これからの課題とまとめ

バイモーダルITとは何か ～1-1.バイモーダルITの定義～

バイモーダルITとは、2015年にガートナー社が発表したITの考え方で、ITをコストの削減や効率化などを重視した「モード1」と、柔軟性やスピードを重視した「モード2」に使い分ける考え方のことです。

1 モード1

SoR（後述）に対する守りのIT。データベースや統合基幹業務システム(ERP)などのあらかじめ要求が決められた予測可能な記録型の業務領域。

2 モード2

SoE（後述）に対する攻めのIT。時代の変化にいち早く対応する機敏性やスピードを重視し顧客やユーザーとの結びつきを作り気づきや発見を提供していく業務領域。



バイモーダルITとは、このモード1とモード2の二つのチームを同時に機能させ、
タイミングや必要性に合わせて柔軟に機能を使い分けていくIT戦略です。

バイモーダルITを理解するためには、情報システムが歩んできた道のりを見ていく必要があります。
まずは情報システムの流れを見ていきましょう。

バイモータルITとは何か ～ 1-2.情報システムの流れ～

今まで「コストの削減や効率化などを重視したIT」を、情報システム部は扱ってきました。しかし、技術の進歩とともに、ITシステムの利用目的は変わりつつあります。

【情報システムの流れ】

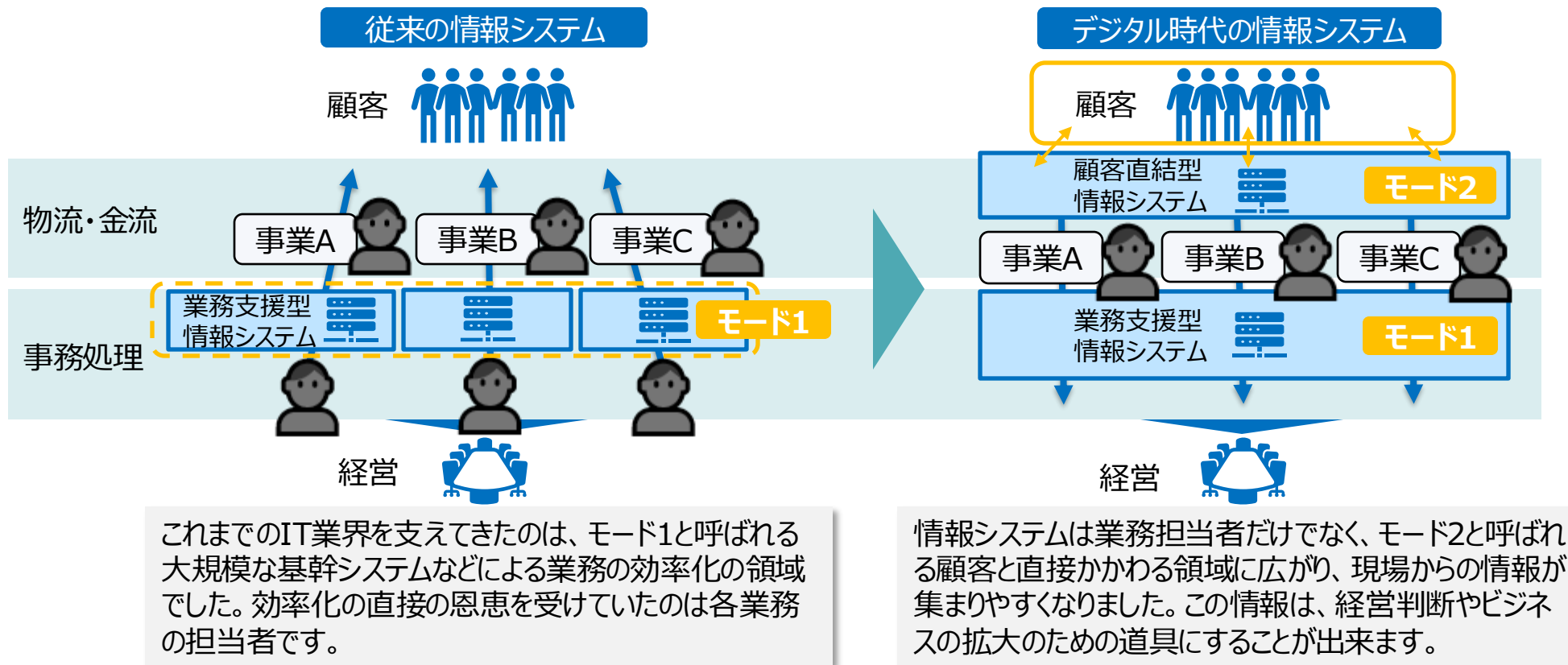
	SIの時代	ERPの時代	クラウドの時代	デジタルトランスフォーメーションの時代
時代	1980年代	1990年代	2000年 ～2010年代半ば	2010年代半ば ～現在まで
IT環境	メインフレームが主流 パソコンの発展	クラサバの普及 オープン化の流れ	モバイル、クラウドシフト、 ソーシャル化	クラウドの進展、 AI/ビッグデータ/IOTの活用
IT投資の 狙い	ITを利用した競争優位の 確立	業務の標準化 グローバルスタンダードへの 対応	ITの機動性・柔軟性の 確保	新たな事業モデル/新サービ ス事業の確立 業界構造の変革
中心 サプライヤー	IBM、NTTデータ、富士 通などの大手Sier	SAP、オラクルなどのERP ベンダー	アマゾン、グーグル、セール スフォースなどのクラウドベ ンダー	X-techベンチャー、ロボティク スメーカー、AI関連事業者 など
情報 システム 部門の変遷	情報システム部門	情報システム部門子会 社	情報システム子会社の譲 渡 アウトソーシング	海外展開 異業種連携 内製化
開発手法	――	ウォーターフォール開発	ウォーターフォール開発 アジャイル開発の出現	アジャイル開発、 ウォーターフォール開発

出典元：日本M&Aセンター「IT業界の歴史とM&Aトレンド-IT業界M&Aコラム2019①」
URL) <https://reorganization.nihon-ma.co.jp/20190228>

バイモダルITとは何か ～1-3.なぜ提唱されたのか～

経営判断の道具となるため、顧客と繋がるITは重要視されつつあります。それゆえ、業務支援型のITシステムだけでなく、顧客直結型のシステムを求める、経営層からの声は大きくなるでしょう。

【情報システムの流れ】



※デジタルトランスフォーメーションとは

デジタルトランスフォーメーションとは、テクノロジーのちからによって、ビジネスのしくみや経営を再構築することです。多くの業界でITの技術による新しい変革が起こり始めています。「DX (Digital Transformation の略)」と省略して使われることもあります。

出典元：デジタル・アドバイジング・コンソーシアム株式会社「デジタルトランスフォーメーション (DX) とは」 (URL) https://www.unirita.co.jp/knowledge/magazine_2016/201611_4-5.html
株式会社ユニリタ「アナリティクス閑話 ～バイモダルITと情報システム世代の働き方～」 (URL) <https://solutions.dac.co.jp/glossary/dx>

バイモーダルITとは何か ～1-4.二つのモード～

モード1とは性質の異なるモード2の情報システムも今後は求められるため、情報システム部はニーズの変化に対応していかなければいけないでしょう。

1 導入領域

近年の情報システムはモード1とモード2の二の軸に分かれてきているとガートナーは考えました。これまでは社内に向けてのシステムの領域(モード1)が情報システム部の主な領域とされていました。現在、デジタルの時代に突入したことで今まであった顧客との接点から新たにデジタル領域における顧客との接点が増えたことで、安定性を重視したシステムだけではなく俊敏性を重視した流れ(モード2)からも情報システムの需要が発生し始めたことが理由です。

2 開発方法

バイモーダルITの考え方はシステム開発におけるウォーターフォール型開発かアジャイル開発かという開発手法にかかわる話題にも関連しており、情報システム部をモード1とモード2に分けて考えるか、あえて一つの組織で進めていくのかという組織論の観点としても用いられています。

3 システム設計概念

バイモーダルITに合わせてSoRとSoEという言葉の定義も認知されるようになりました。
顧客が製品やサービスを購買後に処理、格納するSoRの概念と、
製品やサービスをいかに顧客に買ってもらうかを狙うSoEの概念は、
バイモーダルITにおけるモード1とモード2に類似しており、同義と認識されたり、引き合いに出されることが多くあります。

**ガートナーは各業界でデジタルトランスフォーメーションが起きており、
テクノロジーの発展や人材に関しても大きな変革が起こると述べています。
今回のホワイトペーパーでは、バイモーダルITの考え方を確認しながら
今後の情報システム部に何が必要なのか見ていきたいと思います。**

-
1. バイモーダルITとは何か
 - 2. これまでの情報システム部**
 3. これからの情報システム部
 4. バイモーダルITを取り入れた事例
 5. これからの課題とまとめ

これまでの情報システム部 ～2-1. SoR(System of Record) ～

これまでの情報システム部は、モード1と呼ばれるユーザー情報・製品情報の処理や格納をするための記録型のシステムを扱ってきました。これらのシステムはSoRとも定義されます。

1 SoRとは

SoEは、ガートナーのバイモーダルITでの情報システム部の立ち位置はモード1の領域に当てはまります。このモード1はデータベースや統合基幹業務システム(ERP)などの記録型のシステム領域であり守りのITともいわれています。

1 SoRの役割

SoRには信頼性/安全性/安定性が重視されます。SoRに分類されるシステムは、どこまで何を行っていくのかなど、予測可能な範囲での領域を守り一定の高いパフォーマンスを発揮することが前提にあるからです。

記録型のシステム構造には、従来より開発・運用されてきた80年代のメインフレームや、近年の金融サービスシステム、顧客データや個人情報なども含まれています。セキュリティの観点からも安全性が求められています。

SoRの強みは、階層構造の組織に従順で、目標や方針が明確になるとシステマティックな統率力と推進力で実行できることです。

SoRの領域は、データの記録を中心にしながらITを活用していく、守りのITといえるでしょう。

これまでの情報システム部 ～2-2.情報システム部のこれまで～

これまでの情報システム部の主な使命はモード1を推進していくことであり、今も昔も変わらず企業にとって基幹となる必要不可欠な存在です。

1 組織における情報システム部の役割

情報システム部の業務領域は企画・構築、運用・保守やヘルプデスクなどその業務範囲は多岐にわたります。業務にITが多く活用されている現代では必要不可欠な存在といえるでしょう。

また、この業務内容はSoRの領域でありモード1であるといえます。

2 モード1の目的

モード1の目的は効率化にあります。

既存のプログラミングやシステムの効率を上げて稼働させることや最初に定義された要件に対応できるようにシステムを動かしていくことです。

3 情報システム部を取り巻く環境変化

しかし、今日ビッグデータによる非構造的情報や内部統合によるシステム構造の変化など、情報がデジタル化の波によって複雑化されその影響は顧客やユーザー側だけではなく情報システム部にまで影響しています。

-
1. バイモーダルITとは何か
 2. これまでの情報システム部
 - 3. これからの情報システム部**
 4. バイモーダルITを取り入れた事例
 5. これからの課題とまとめ

これからの情報システム部 ～ 3-1. SoE(System of Engagement)～

これからの情報システム部は、消費者やユーザーを対象に情報を提供するような探索型のシステムを扱うようになります。このシステムはSoEとも定義されます。

1 SoEとは

SoEとは、マーケティングオートメーション、SNSの運用などを用いて、顧客との新たな接点を見出すシステムのことをさし、攻めのITとも呼ばれます。

※マーケティングオートメーションとは

企業のマーケティング活動において、旧来は人手で繰り返し実施していた定型的な業務や、人手では膨大なコストと時間がかかってしまう複雑な処理や大量の作業を自動化し、効率を高める仕組みのことです。また、そのような自動化を実現するソフトウェア・ツールを指す場合もあります。

出典元：株式会社イノバ「マーケティングオートメーション（MA）とは何か？機能と導入のメリット」
URL) <https://innova-ip.com/201602-make-the-most-of-ma/>

1 SoEの役割

SoEは売り上拡大や顧客とのより深い関係性や顧客体験の向上をを第一に考え、スピードを重視し柔軟性のある性質を持っています。

SoRのように決まったことに対して従順にアクションを起こしていくのではなく、ITと一体化したデジタル・ビジネスや、課題解決に向けた顧客とのコミュニケーションに必要な業務が、SoEの領域といえます。

また、SoEの強みは成果を達成するために失敗と学習を繰り返しながら試行錯誤していけることです。階層構造には縛られず探索能力や機動力を生かしてビジネスに新たな価値を創造することがSoEの領域です。

SORとSoEも含めモード1とモード2の性質を比較してみましょう。

これからの情報システム部 ～3-2.モード1とモード2の比較～

モード1とモード2とでは性質が大きく異なるため、それぞれの特徴を理解し、適切な対応を取ることが求められます。

	モード1	モード2
領域	守りのIT	攻めのIT
方向性	安定性重視	速度重視
管理部門	IT部門が集中管理（クローズド）	ユーザー部門が分散管理（オープン）
業務対象	予測可能業務	探索型業務
重視すること	効率性、ROI	新規性、大きいリターン
投資方法	開発・運用コストを下げる	新たなビジネスの種まきや強みを作る
思考性	IT部門中心思考 ITでの効率化を目指す	ビジネス思考 ITでの目的達成を目指す
開発環境	ウォーターフォール	アジャイル・ハイブリッド
運用環境	ITIL	DevOps
様式	SoR	SoE

これからの情報システム部 ～3-3.モード1とモード2の違い～

情報のデジタル化が進み様々な分野でのITの活用が可能となり、モード2の需要が高まっています。これは情報システムに関しても同じことが言えます。

1 モード1の目標

モード1のゴールはITの技術を使っでの効率化を図っていくことです。そのため、モード1のコミュニケーションでは、何を達成したいか顧客やユーザーが理解しており、要求にあった業務を進めていくことが必要となります。情報システムに関わる人たちは要求に応えていく方法で業務を進めていきます。

2 モード2の目標

モード2はITを使って顧客・ユーザーを巻き込み、ビジネスの目的を達成することがゴールです。モード2では、顧客やユーザーでさえも何をしてほしいかが具体的に決められておらず、答えを持っていません。そのため、情報システムに関わる人たちがITの専門家の立場で、ビジネスを成功させるために何を行うべきか探索していくことがモード2のコミュニケーションとなります。

	モード1	モード2
前提条件	中長期的に変わらない目標と到達地点がある。	顧客やユーザーの要求が決まっていない。
強み	目標や組織に従順でシステマティックな統率力と推進力のコミット力	失敗と学習を繰り返し試行錯誤しながら探索能力や機動力を生かした柔軟な力
コミュニケーション	何を達成したいか顧客やユーザーが理解しており要求を達成するための業務を進めていくこと	ビジネスの成功させるために何を行っていくのかを探索していくこと
ゴール	ITの技術を使っでの効率化を図っていくこと	ITを使って顧客・ユーザーを巻き込んでビジネスの目的を達成すること

**モード1とモード2では、コミュニケーションの取り方やゴールが異なるため
それぞれに適したアクションが求められる**

これからの情報システム部 ～3-4.モード1とモード2の優劣～

テクノロジーの発展に伴い、ユーザー企業がITへ期待することは、モード1からモード2へシフトしていくことだと考えられます。

【運用イメージ】

下図はモード2により開発されたシステムが、運用フェーズではモード1の領域で運用される例です。



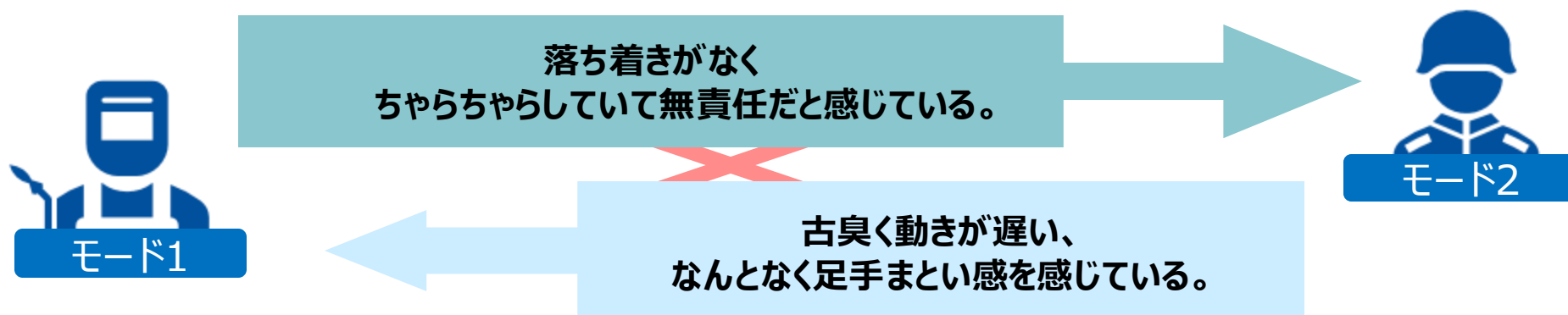
モード1とモード2はどちらが優れているということではなく相互に補完しあう関係です。
しかし、ガートナーは文化・思想などが違うため、これらの間で対立が起きる懸念もあるとしています。
では、文化や思想による対立とはどのような対立なのでしょう。

これからの情報システム部 ～3-5.モード1とモード2の対立～

バイモーダルITにはモード1とモード2の両方のシステムが必要ですが、それらを同時に扱うと反発が生じやすくなるため、対応が必要です。

- ガートナーはモード1とモード2の間には業務の扱い方やマインドセットなどの内面の思想や文化的が大きく異なるために組織の中で対立が生まれやすくモード1とモード2を同じチーム内の組織で動かしていくことが難しいとさえ述べています。

【モード1とモード2の関係性】



ガートナーはこのような対立を抑えるために調整役となるガーディアンが存在を定義しています。
ガーディアンに関しては次のページで見てみましょう。

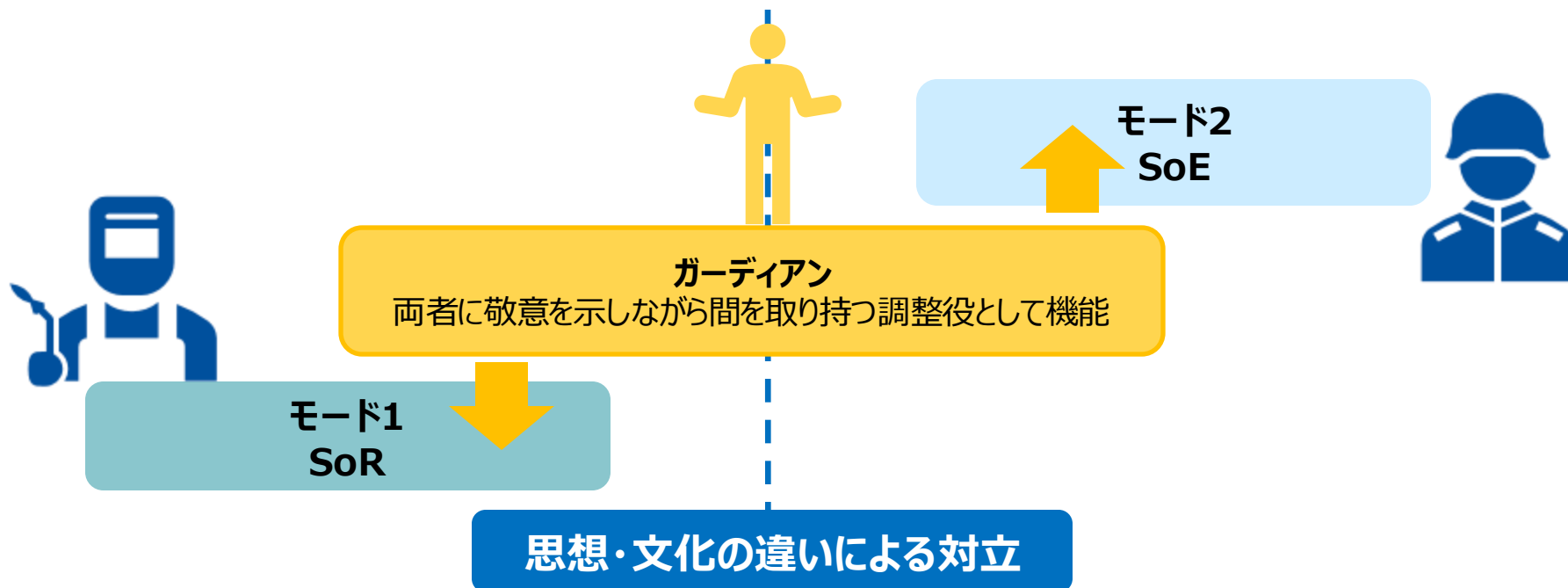
これからの情報システム部 ～3-6.ガーディアン的重要性～

モード1とモード2の間で中立的な立場をとり、連携をサポートする事で、システムのQCDの最適化を図るガーディアンというポジションが必要となります。

【ガーディアンに必要な要素】

- モード1とモード2のそれぞれの特性の理解し、間に入り調整を行う。
- システムの特性を判断することが可能。
- それぞれの組織文化に敬意を持つ事ができる柔軟さや許容を持っている。
- モード2が理解でき、最新技術に追従している。

【ガーディアンとモード1とモード2の関係性】



-
1. バイモーダルITとは何か
 2. これまでの情報システム部
 3. これからの情報システム部
 - 4. バイモーダルITを取り入れた事例**
 5. これからの課題とまとめ

バイモーダルITを取り入れた事例 ～4-1.バイモーダルITの活用事例～

バイモーダルITの言葉は、一見当たり前のように感じられるかもしれませんが、しかし、いざ取り組もうとすると実態がわかりづらく、未だに発展中の考え方です。以下はいち早く着手した会社の事例です。

事例1:大手電機メーカーF社の事例

大手の電機メーカーF社ではいち早くバイモーダルITの組織作りに着手しました。

デジタルトランスフォーメーションに対しての施策として実施し、国内におけるデジタル人材の不足をいち早くとらえ情報システム部のみでの完結から、お客様側の経営層や事業部門とタッグを組み新しい価値を見出すチームを発足しました。SEを問題解決型人材としてシステムエンジニアとソリューションエンジニアのチーム(モード1)と、探索型人材としてシナジーエンジニアとシードエンジニア(モード2)の**2つのチームに分けた点がバイモーダルITといえるでしょう。**

シナジーエンジニアは顧客と新たな価値を見出すために生まれ、シードエンジニアは世界を昇順としてサービスを打ち出していくチームです。さらにDXを加速する具体的な施策として2つの社内メディアを動かし啓蒙活動を行い、社内における探索型の人材を発掘し顧客と対等関係にあるチームを作成し探索するところから始め0から1を生み出すプロセスを積極的に行った結果、**社内における人材育成の効果と社員のモチベーションのアップにつながりました。**

また、一つの成果として完成したデザイン思考とアジャイル開発を取り入れたAIボットが完成しました。モード1の領域である課題解決型のビジネスとモード2の領域である価値創造型のビジネスを並行して行うことで、従来のやり方であった情報システム部への発注ではなく別部署への直接の受注を受け横展開から広げる**拡大型のビジネスモデルから脱却することにもつながる結果が得られました。**

出典元：日本ビジネスプレスグループ「デジタル時代に対応する富士通の取り組み」(URL <https://jbpress.ismedia.jp/articles/-/55717?page=1>)

バイモーダルITを取り入れた事例 ～4-2.バイモーダルな組織の活用事例～

2018年に経済産業庁が発表したデザイン経営宣言も、今までの経営法(モード1)からデザイン経営(モード2)を取りいれて、新しい価値を置くという流れがバイモーダルと言えるでしょう。

事例2:「デザイン経営」宣言

デザイン経営宣言は、経済産業庁が2018年に発表された企業のイノベーションをデザインで解決するという経営手法です。

日本の企業は欧米の企業と比較してデザインに対しての投資を行ってきませんでした。

アップルやダイソンなど欧米の**デザインを強く取り入れた企業**と、日本の企業の成長率や利益率を比較すると、**約4倍の差**が結果として表れています。

明確な答えがない中、クライアントや依頼された要件から情報をくみ取り近づけていくデザインの領域は、開発手法で考えるとアジャイルの考え方やモード2の中にある探索型の業務と考えられます。

今までの経営方法がモード1だとすると、**経営にデザインの考え方を取り入れることがモード2につながっている事例だ**といえるでしょう。

出典元：経済産業省・特許庁「「デザイン経営」宣言」(URL) <https://jbpress.ismedia.jp/articles/-/55717?page=1>

バイモーダルITを取り入れた事例 ～4-3.バイモーダルIT運用上の注意点～

バイモーダルITの組織を目指すには、リスクに前もって対処することが必要となります。

1 1つのチーム内でモード1とモード2を兼任させない

1つのチームがモード1とモード2の両方として機能させてしまうとそのチームが管轄しているシステムにクリティカルなアクシデントが起きたときにはリカバリに集中することになってしまい業務の住みわけが曖昧になってしまいます。モード1とモード2のチームはそれぞれ独立したチーム（連携は必要）として運用していくことが必要です。

2 モード1と2を完全に分離する

一見上記と矛盾して見えるようですが、兼任してチームを作るのもNGですが、完全に独立させた組織にしてもNGということです。モード1からモード2へ、モード2からモード1への連携を取るべき情報が取れなくなってしまう可能性がある為です。2つのモードは連携して緊密に連携する必要があります。

3 ビジネスモデル全体を考え直す

ITの運用方法を変革することは、ビジネスモデル自体に変化を与える可能性があります。
したがって、予算編成や意思決定、計画など様々な分野に影響が生まれることが予想されます。

4 ビジネスリーダーを任命する

ビジネスを引っ張れる強力なリーダーが必要です。モードによって目標やKPIに違いがあり、リーダーはモード1からではなく、モード2のチームから人選が必要です。モード1の管轄は情報システム部だけの領域となるので、ビジネス側との接点が高いモード2のKPIをモード1の人が作成すると見当違いなKPIになる可能性があります。

-
1. バイモーダルITとは何か
 2. これまでの情報システム部
 3. これからの情報システム部
 4. バイモーダルITを取り入れた事例
 - 5. これからの課題とまとめ**

これからの課題とまとめ ～5-1.攻めの情シスとは～

攻めの情報システム部には、モード1とモード2の両社の視点をあわせ持つことや、自社内でまかなえるだけの人的リソースが必要となります。

1 情報システム部に求められる役割変化

今まで情報システム部は、企業の中で守りのITを担ってきました。

しかし、今後は攻めのITであるモード2も、情報システム部に対して求められるでしょう。

というのも、ITの技術は日々驚くべき進化を遂げ、あらゆる課題はITによって解決されてきました。今後さらにテクノロジーが進み、AIやクラウドによって守りのITの領域は、自動化などのさらなる効率化が行われていくことが予想されます。その中で新しい技術やシステムのニーズが高まっていることは明らかであるからです。

デジタル化に伴い情報システム部が市場価値を失わないためには、モード1およびモード2の双方の視野を意識しながら、守りから攻めのフィールドへと新たなステージに立つことが重要です。

2 世界と比較した日本の情報システム部

日本の企業での情報システム部は他国と比較すると保守的な要素が大きいです。

また、ユーザー側が抱えるITエンジニアは少なく、プロジェクトごとに期間が絞られることも多くあります。そのため、デジタルビジネスを推進するためには外部のITベンダーやSIerから人的リソースの確保を頼らざるをえない状況が続いています。

一方で、欧米の会社はユーザー企業側にITエンジニアがいるので、自社のリソースでデジタルの波に乗ることが可能です。

そういった意味で、日本は諸外国と比較するとITの分野にはまだ遅れがあるといえるでしょう。

これからの課題とまとめ ～5-2.モード2の視野を持った人材とは～

モード2の視野を持った人材とは、ビジネス全体を見据えた観点を持つ人物のことをさします。今後はモード2の観点で考えられる人材を育成してゆく必要があるでしょう。

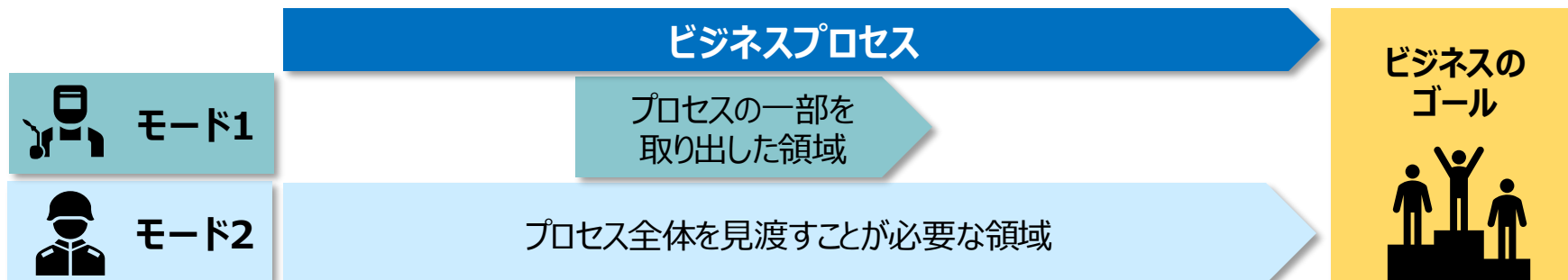
1 モード1が扱う領域

モード1の観点では、あらかじめ決められた要求への問題解決を行うという、決められた領域内での業務を得意としています。そして、決められた領域内とは、ビジネスプロセス全体の観点で見ると、一部分を切り取った業務といえます。（下図参照）

2 モード2が扱う領域

モード2の観点では、ITの立場からビジネスプロセス全体を見ることが求められます。情報システム部のように要件の領域だけではなくビジネス全体からの提案ができる人材になっていくことがモード2の視野を持った人材であるといえるでしょう。

【モード1とモード2の全体像】



これからの課題とまとめ ～5-3.これからの課題～

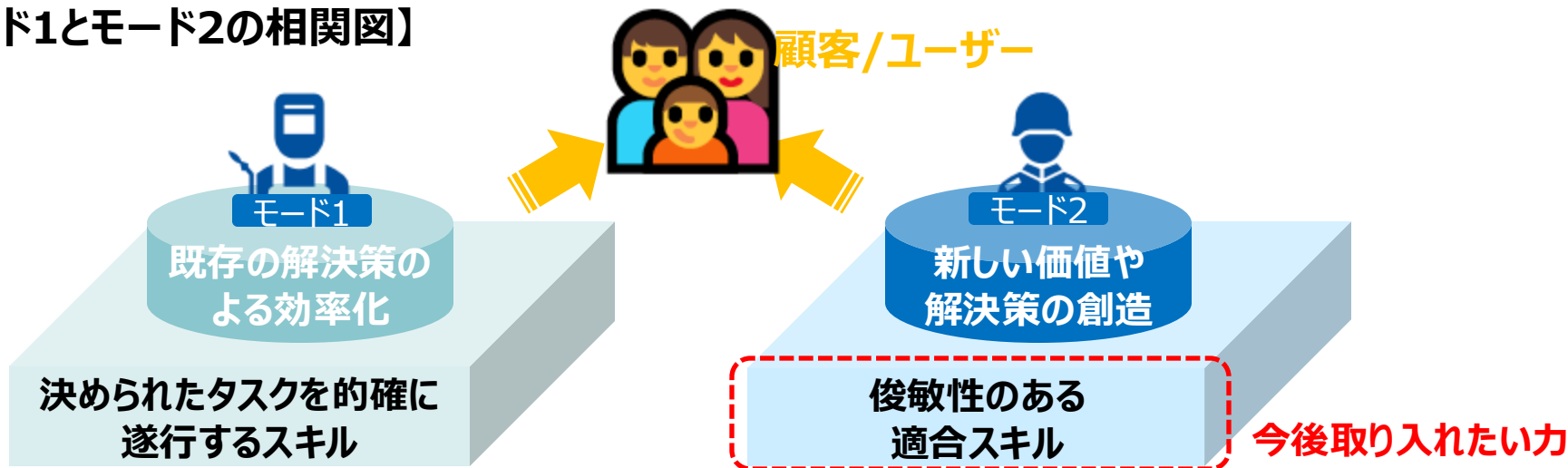
今後のIT業界が抱える課題である、2025年の崖問題やVUCAなどの解決に、モード2の姿勢が必要となってきます。

日本のITは情報システム部を中心にモード1の動きによって支えられ成長してきました。しかし、今後の社会に求められているのはモード2のような俊敏性の高い適合スキルです。

インターネットが普及しシステムのオープン化が行われたように、デジタルの波によって技術が技術によって簡易化されていくことも想定できます。モード1からモード2の観点を持つことでビジネス全体とシステムの両方が見られるようになることにつながります。

情報システム部では、モード1とモード2の両社視点を取り入れることで既存の課題解決からあらたな価値を見出し、新しい課題や問題の発見を見出せるような能力が重宝されるでしょう。

【モード1とモード2の相関図】



これからの課題とまとめ ～5-4.モード2の視野を取り入れるために～

モード2の視野を取り入れるためには、会社全体の視点で物事を考える必要があるため、関係者同士が互いを尊重して関係性を深めるためのHRTの原則が重要となります。

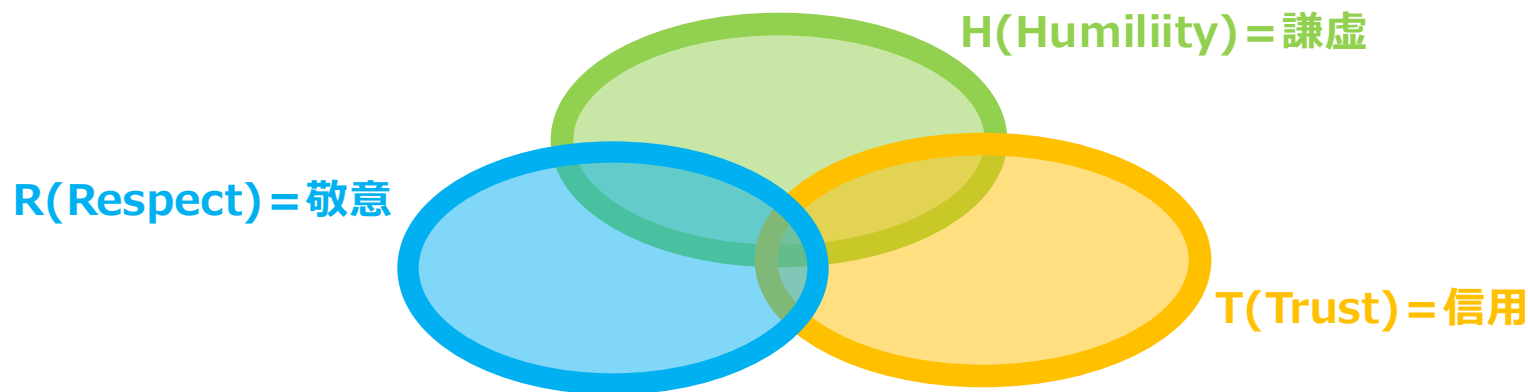
1 モード2の視点

モード1が予測可能な範囲の視点であるならば、モード2はこのテリトリーの外にあるビジネス全体の視点が必要となります。そのため、会社が作っているプロダクトやプロジェクトが、どう組織をスケールさせることにつながるのかという観点を持つことが大切です。

2 HRTの原則

バイモーダルITを成功させるためには、組織の中での文化をまるごと変化させる必要があるかもしれません。それには、HRTの原則を守ることが有効とされてます。

HRTの原則とは、【謙虚】【敬意】【信用】の3つの観点で構成されます。関係者同士は互いに謙虚に、敬意をはらい、信用することで関係性を深めていくことができます。この三つの実行は精神論ではなく実行していくことが大切だと考えられています。



これからの課題とまとめ ～5-5.HRTの原則を進めるためには～

HRTの原則を進めるためには、まずコミュニケーションの活性化を行い、時代に先駆けて新しいチームで運用していく必要があります。

1 コミュニケーションの場を作る

HRTの原則を実行していくには日常的に顔を合わせるような環境を作ったり、社内イベントをしたり、新しい技術のレビュー会などのオフラインでのコミュニケーションの取り方から変えることはもちろん、オンライン上でもSLACKなどのチャットコミュニケーションツールを積極的に利用したりなどコミュニケーションをとるまでの壁を小さくし活性化された組織を作っていくことです。

2 意識の変化

こうした文化を作っていくことでコミュニケーションの促進しHRTの原則が浸透すると社内で自発的に間を取りもってくれるメンバーが出てくるなどコミュニケーションによって社内の情報の透明化が行われていきます。

この文化が生まれることで一人一人がモード1とモード2の感覚を無意識的に持つことにつながります。この共通の感覚を持つことで会社の一体感や会社の成長スピードにもつながっていくと考えます。

**情報システム部が、今後も舵を取って情報を扱える人材として生き残るためには、
会社の文化や組織まで変革していくこと、**

またそのために小さいところからアクションを起こしていく必要があります。

このように、モード2の視野を持った攻めの姿勢が、これからの情報システム部です。

これからの課題とまとめ ～5-6.今回のまとめ～

バイモーダルITのまとめ

1 これからの情報システム部

デジタルの時代においてITが影響を与える範囲がさらに拡大されたことでこれからの情報システム部は攻めのITをどうドライブさせていくかということが課題となっていくでしょう。

1 これからの情報システム部

元来、モード1とモード2のどちらも会社を成長させたいという点では同じ価値観を持っていると考えられ、それぞれの特性が社内で活かせることが大事です。

今までの情報システム部が攻めの情報システム部に変化し、新たな価値を見出していくことがその組織の強みに代わっていくのではないかと思います。

**組織や文化を変えていくために、新しくモード2のチームを作成し、
コミュニケーションをとるなど小さな第一アクションから
起こしていくのはいかがでしょうか。**

INTLOOPについて

さまざまな経営課題の解決を支援するコンサルティング事業を主軸に、テクノロジーを駆使しビジネスモデルの変革を目指すデジタルトランスフォーメーション事業、システムの開発・導入を支援するテクノロジーソリューション事業、専門性の高い人材を紹介する人材ソリューション事業の4事業を柱に事業を展開。

常にお客様の視点に立つことを第一義に考え、お客様の課題に対して最適なソリューションを提供し続けています。

お問合せ

下記フォームよりお問合せください。

<https://www.intloop.com/contact/general/>

記載の企業ロゴデザインについて

記載している企業のロゴ、商標は企業が提示しているガイドラインを確認したうえで記載しています。
デザイン、商標についての著作権は、それぞれの企業に帰属しています。

免責事項

この文書に記載されている情報は一般的なものであり、特定の個人や組織に対するアドバイスを提供するものではありません。掲載情報の正確さについてできる限りの努力をしていますが、その正確性や適切性を保証するものではありません。
何らかの行動をとられる場合は、本資料の情報のみを根拠とせず、専門家による適切な分析・アドバイスをもとにご判断ください。当資料を用いて行う一切の行為、被った損害・損失に対しては当社は一切の責任を負いかねます。予めご了承ください。
当資料の著作権は当社にあります。当資料の転載、流用、転売など、ダウンロードされたご本人様以外のご利用は固くお断りさせていただきます。